

おおう・かぶせる

田村公男

1. はじめに

国立国語研究所1964によれば、「おおう」「かぶせる」はともに「2.113包摂」の項に分類されている。

いま、二語を含む代表的な例文をあげてみよう。

(1) 口を 袖で おおう。

(2) 望遠鏡の先に 布を かぶせる。

(1)(2)において、「おおう」「かぶせる」の意味が似ていることは、直観的に明らかであろう。しかし、二語を置き換えることはできない。なぜならば、二語のあいだには、構文的な差が存在するからである。以下、この二つの動詞「おおう」と「かぶせる」の意味・用法について考察してみよう。

2. 構文

「おおう」と「かぶせる」では構文が異なるので、このままでは二語の用例を比較して意味分析をするには不便である。そこで、次のような概念を導入する。

いま、おおうもの・かぶせるもの—外側ないしは上側にあるもの—を「着装するもの」とする。一方、おおわれるもの・かぶせられるもの—内側ないしは下側にあるもの—を「着装されるもの」とする。ここで、前者をB、後者をCで表し、動作の主体をAで表せば、二語の構文はそれぞれ次のようになる。

Aガ Cヲ Bデ おおう。

Aガ Cニ Bヲ かぶせる。

(A・B・C：名詞)

3. 分析

3. 1. 動作の主体

動作の主体となる名詞は、格助詞「が」をとる。

(3) 母親が 子供の目を 手で おおう。

(4) 母親が 子供に 帽子を かぶせる。

(5) 鳥が 巣を 木の枝で おおう。

(6) 鳥が 巣に わらを かぶせる。

(7) 犬が 骨を 土で おおう。

(8) 犬が 骨に 土を かぶせる。

動作の主体は、人間・動物（これを「有生」と定義する）であれば、二語とも使えることがわかる。

なお、動作の主体には、二語のあいだに示差の特徴がみられないので、必要のない限り以下の例文では省

略する。

3. 2. 着装するもの

まず固体について考えてみよう。

(9) 苗床を ビニールで おおう。

(10) 苗床に ビニールを かぶせる。

(11) 屋根を トタンで おおう。

(12) 屋根に トタンを かぶせる。

(13) 顔を ハンカチで おおう。

(14) 顔に ハンカチを かぶせる。

(15) ごみを 土で おおう。

(16) ごみに 土を かぶせる。

(17) 揚げ物を 小麦粉で おおう。

(18) 揚げ物に 小麦粉を かぶせる。

(19) 電線を ゴムテープで おおう。

(20) 電線に ゴムテープを かぶせる。

これらの例文だけからは、示差の特徴は見いだせない。しかし、動作の主体と着装するものとの関係を考えてみると、着装するものにある制限が存在することがわかる。

(21) 親鳥が ひなを 羽で おおう。

(22) *親鳥が ひなに 羽を かぶせる。

「おおう」は着装するものとして、動作の主体である「親鳥」の体の一部である「羽」をとることができる。しかし、「かぶせる」はとることができない。「羽」は「親鳥」にとっては、分離不可能なものである。また、(3)~(8)はすべて分離可能な名詞の例である。

したがって、「おおう」は着装するものとして、動作の主体から分離可能な名詞ばかりでなく、分離不可能な名詞もとりうる。それに対して「かぶせる」は、分離可能な名詞はとりえても、分離不可能な名詞はとりえない。

次に液体の例をあげてみよう。

(23) *野良猫を 水で おおう。

(24) 野良猫に 水を かぶせる。

(25) *泥棒を 熱い油で おおう。

(26) 泥棒に 熱い油を かぶせる。

「おおう」は着装するものとして、液体はとりえず、「かぶせる」はとりうる。

3. 3. 着せられるもの

今までの例文をふりかえってみよう。(3)~(20)は着せられるものとして、有生のものまたは固体をとっている。したがって、これらの例文からは、「おおう」「かぶせる」の示差的特徴を見いだすことはできない。

3. 4. 着せられるものと着せられるものとの関係

着せられるものBと着せられるものCとの関係を考えてみると、動詞によって要求されるBとCの関係が異なるのがわかる。以下二つの側面から考えてみよう。

3. 4. 1. 包囲の完全性

BがCの一部ではなく、全体を包み込む状況を「包囲の完全性」ということにする。

- (27) 歯を 金で おおう。
- (28) 歯に 金を かぶせる。
- (29) *井を ふたで おおう。
- (30) 井に ふたを かぶせる。

(27)の意味は、歯の穴に金を詰めることではなく、歯全体を包み込むことである。それに対して(28)は、歯全体を包み込む意味ばかりではなく、歯の穴だけに金を詰める意味にもとれる。また、(29)が不適格であるのは、井全体をおおってしまうほど大きなふたは、現実問題として存在しないからである。

このことから、「おおう」はBがCの全体を包み込むときだけに使え、一方「かぶせる」は、全体でもよいし、一部分であってもよいことがわかる。一部分と解釈できる例としては、(4)(30)の他に次のようなものがある。

- (31) 万年筆に キャップを かぶせる。

キャップをかぶせる部位は、万年筆全体ではなく、ペン先の部分だけである。

3. 4. 2. 密着性

着せられるものBと着せられるものCが、接触している状況を「密着性」ということにする。

(3)~(20)はすべてBとCが密着している。次の例文では、BとCは密着しているのだろうか。

- (32) マッチの火を 手で おおう。
- (33) *マッチの火に 手を かぶせる。
- (34) 暴れる猿を ネットで おおう。
- (35) 暴れる猿に ネットを かぶせる。
- (36) 野球場を ドームで おおう。
- (37) ?野球場に ドームを かぶせる。

(32)において、「マッチの火」と「手」とは接触しな

い。しかし(33)では、「マッチの火」と「手」が接触することを意味し、やけどをしてしまう。(34)は、「ネット」が「猿」に密着していても、密着してなくても「おおう」は使える。(37)の「ドーム」と「野球場」とは、一体ではあっても密着していないので、「かぶせる」は使いづらい。

したがって、「おおう」は密着性に対して中立であり、「かぶせる」は密着性を要求することがわかる。

3. 5. 「おおう」に特有の用法

前述のように、「おおう」の構文を

Aガ Cヲ Bデ おおう。

としたが、そのうちのAもしくはBの欠けた構文が存在する。

3. 5. 1. 着せられるものBがない構文

Bがない構文には、どんな例文があるのだろうか。

- (38) あまりの悲惨な情景に 目を おおう。
- (39) 耳を おおって 鈴を盗む。

これら二例は、Bが「手」であることが明らかであるので、省略された文である。

- (40) 罪を おおう。
- (41) 欠点を おおう。
- (42) 真相を おおう。

「罪」「欠点」「真相」は抽象的なものである。このときBに相当するものがないのでとりえない。

したがって、構文としてまとめると次のようになる。

(Aガ) Cヲ おおう

次に、抽象的なものに「かぶせる」を使ったときを考えてみよう。

- (43) *罪を かぶせる。

「かぶせる」は、Cが欠落すると正しい文ではなくなる。次のようにする必要はある。

- (44) 他人に 罪を かぶせる。

ここで注意したいことは、(40)では「おおう」を「かくす」の意味で用いるのに対して、(44)では「かぶせる」を「なすりつける」の意味で用いることである。また、「おおう」は「罪」を、本来的に自分の持っている分離不可能なものとして要求する。これは、Bをとらないときの、「おおう」のCのもつ特徴であると考えられる。一方「かぶせる」は、「罪」を人になすりつけることのできる、分離可能なものとして要求する。「かぶせる」については、3. 2で考察したBの特徴と一致する。

3. 5. 2. 動作の主体をとらない構文

格助詞「が」をとる名詞が、動作の主体でないときがある。

- (45) 頭髪が 額を おおう。
- (46) 木が 山道をおおう。
- (47) 深い雪が 盆地をおおう。
- (48) 熱気が 会場をおおう。

これらの例文で「かぶせる」を用いることはできない。「頭髪」「深い雪」「熱気」は、格助詞「が」をとってはいるが、動作の主体ではない。そこで次のように仮定してみよう。

「おおう」は、動作の主体をとらない構文で、着装するものが格助詞「が」をとる。すなわち、

Bガ Cヲ おおう。

という仮定である。

このとき「おおう」は、意志的動作としてではなく、自然現象の結果として、おおわれた「状態」になったことを表わす語であると考ええる。つまり、木が繁った結果、山道をおおい、雪が降った結果、盆地がおおわれるのである。(48)のようにBが抽象的な名詞の場合は、人が集まって熱気が高まった結果、会場が熱気で包まれるという、二段階的な状況になる。以上のことは、次のことと関係があるようである。

「かぶせる」は「かぶる」と対応関係がある。それに対して、「おおう」には対応する語がない。いま、「かぶせる」を「かぶる+（さ）せる」と考えることにする。そうすると、「かぶせる」は着装以前の状態から着装以後の状態への「変化」に主眼がおかれている語と考えられる。すなわち、(44)の例でいえば、本来罪をもたない人に、罪をなすりつけて、罪のある状態へと変化させる行為、それが「かぶせる」である。

他方「おおう」は、動作の主体をとらない構文において自動詞的ニュアンスが強くなって、CがBにおおわれている「状態」に主眼がおかれている語と考えられる。

4. まとめ

構文的には、次のように整理できる。

「おおう」:(i) Aガ Cヲ Bデ おおう。

(ii) (Aガ) Cヲ おおう。

(iii) Bガ Cヲ おおう。

「かぶせる」: Aガ Cニ Bヲ かぶせる。

「おおう」の構文(i)のとき「かぶせる」と類義であり、構文(ii)(iii)のとき「おおう」特有の意味をもつ。

類義である「おおう」の構文(i), および「かぶせる」について分析をまとめると、次の表のようになる。

	A		B		
	有生	固体	液体	抽象的	分離可能
おおう	+	+	-	-	±
かぶせる	+	+	+	+	+

C		BとCとの関係	
有生	固体	包囲完全性	密着性
+	+	+	±
+	+	±	+

柴田編1979にも「おおう」「かぶせる」についての分析がある。本稿では、そこでとりあげられていない構文(iii)の例文についても、あわせて分析を行った。

言語経歴：1954年7月、荒川区に生まれ、現在にいたる。

つつむ・くるむ・くるめる

服部 貴 義

1. はじめに

この三語は、国立国語研究所1964では「2. 113包摂」に分類されている。ここではこの三語の分析を試みる。また「くるめる」との関係で「ひっくるめる」にも触れることにする。

2. 分析

従来の分析としては、柴田編1976の「ツツム・クル

ム・マク」、森田1977で「かこむ」の関連語としてあげている「つつむ」の記述などがある。これらを参考にして分析を試みたい。

柴田編1976に、

つまり、ツツムもクルムも、ある物(手段)で、ある(対象)物を〈おおう〉ような場面で用いられるが、……(p. 80)

という記述がある。以下の分析で「おおう」というこ